



金裕貞文学の翻訳Ⅶ : 「金」、 「秋」

朴, 鍾祐
石塚, 由佳

(Citation)

綜合文化, 1:75-85

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496703>



〔翻訳〕

金裕貞文学の翻訳Ⅶ

——「金」、「秋」¹——

朴 鍾 祐
(PARK Jong Woo)

石 塚 由 佳
(ISHIZUKA Yuka)

I. 作品について

本稿は「山里の旅人」、「チョンガーとカエル」(1933年)、「夕立ち」(1934年)、「ノダジ (富鉦脈)」、「金採る豆畑」、「餅」、「ならず者」、「釜」、「春・春」、「妻」(1935年)、「椿の花」(1936年)、「炎天」(1937年)に続いて、七度目となる金裕貞作品翻訳の試みである。今回紹介する「金」は『映画時代』(1935年)に発表された²。つづいて紹介する「秋」は『四海公論』9号(1936年1月)に掲載された作品である。

一作品目の「金」は以前に紹介した「ノダジ (富鉦脈)」、「金採る豆畑」とともに“金裕貞の金鉦小説”と呼ばれる。作家の実体験をもとに、死と隣り合わせの1930年代の朝鮮の鉦山が生々しく描き出された貴重な資料でもある。人が当たり前のように死んでいく極限状態の炭鉦で、生きるために手段を選ばないドクスの極端な行動と、金を前にした途端に理性を失ってしまう同僚の弱さを、監督と鉦夫の両方の目線から冷静に見つめた作品である。

二作品目の「秋」もまた極度の窮乏により人身売買や売春が横行していた植民地地下における農村の実情を諧謔的に描いた作品である。ある年の秋、主人公ジェボンは少し読み書きができるという理由だけで、牛売りの男に妻を売るという友人ポンマニの契約書を代わりに書いてやることになった。ところが数日後、牛売りの男が妻とポンマニと一緒に逃げた

とってジェボンを責め立てに来る。ジェボンは仕方なく牛売りの男と一緒にポンマニと妻を探しに行くという物語である。

この二作品は、1930年代の困窮した朝鮮の農村で、追い詰められた登場人物たちが、極端な考えや行動をとるという点で共通した様相を見せる。本稿では、当時の時代状況を探るため、1930年代の朝鮮の金鉦と金裕貞の関わりについて探ってみることとする。

II. 金裕貞と金鉦

1931年、肺結核を患っていた23歳の金裕貞は、義兄鄭氏の斡旋で病氣療養のため忠清道のある炭鉦所に現場監督として向かった。ところが金裕貞は鉦夫らと一緒に毎日酒ばかり飲んでさらに体を壊したため、わずか三四か月で故郷のシルレ村に戻ったという。このわずかな期間の経験を基に書かれた作品が「金」、「ノダジ (富鉦脈)」、「金採る豆畑」の三作品で、いずれも1935年に創作されている³。

金裕貞がいた1930年代の朝鮮の金鉦とはどのような

1 原題は「금」、「가을」。

2 金裕貞文学村ホームページ、2024.12.23参照。何月号に掲載されたかは不記載。(http://www.kimyoungeong.org/theme/basic/html/kimyoungeong/life.php?ckattempt=1)

3 全商國編、『金裕貞 小説選集 山里の旅人』、ヨニン M&B、2016年、p. 306。

な状況だったのか、時代背景とともに探してみたい。当時の日本では、満州事変後の軍需資金調達のため産金奨励政策を交付し、国内はもとより植民地下にあった朝鮮や台湾にまで金鉱開発を本格化させていた。植民地農業政策により貧困の極みに達していた朝鮮の農夫らは、生業を捨てて続々と金鉱に入って行った⁴。

実は1930年代の朝鮮半島は空前のゴールドラッシュであった。その背景には、19世紀末から世界的に金を金融の中心とする「金本位制」政策がある。「金本位制」は金を預け入れることによって貨幣を発行するシステムで、金の価値は金融市場において中心的存在であった。19世紀、イギリスやアメリカを中心とする世界の列強国は金と連動した通貨制度を導入した。日本も日清戦争後の膨大な賠償金を受け取ることになり、1897年に「金本位制」を導入する。第一次世界大戦後に大恐慌となったことで一度は離脱したものの、1930年に再度金本位制に復帰した。ところが1931年に再び金本位制を離脱するのであるが、むしろ軍需品や原資材の輸入品確保のために金の需要はさらに高まった。そこで朝鮮総督府は朝鮮半島においては、産金奨励政策で補助金を配布することとした⁵。このような金をめぐる潮流がある中、朝鮮半島での金の採掘が重要な懸案となり、さらに地質調査を行った結果、金が多く埋蔵されていることがわかった。それによって金鉱開発に拍車がかかり、一攫千金を狙うゴールドラッシュが始まったのである。

* 金裕貞文学に関しては韓国国内でも編集されたものが多数あるが、本稿では、金裕貞文学村村長を務める全商國編集の『金裕貞 小説選集 山里の旅人⁶』を底本とした。

Ⅲ. 作品翻訳

1 「金 (금)」

金鉱は間違いなくまるで修羅場だ。

監督の目はいつもフクロウの目のように丸くなる。ともすると金泥棒に入られるからだ。もっとも、それでもしょっちゅう泥棒に入られるのだが――

交替しながら、鉱夫たちは一日に三度集まる。彼らはいつものように洞窟の入り口まで来てから足を止める。黙って服をさっと脱ぎ捨てる。

すると坑口を守っている監督は、その前でじっと睨みつけてから、鉱山専用の作業服を一着投げてやる。そいつを受け取って着てから、ようやく洞窟の中へ入って行く。このように違った顔になってようやく、あの土の中の百尺を超える洞窟へ這って入り込むのだ。

それと同様に出て来る奴は、洞窟の入り口の方へ這い出て来て、作業服を脱ぐ。真っ裸で足を振り、手を振りして体をはたいて見せる。そして自分の服を受け取って着て、家に帰るのだ。

これが夏や春なら知らない。真冬の鋭い強風が吹きつけるなら、見れたもんじゃない。裸になって立ち、全身鳥肌が立って震えているその様子。面白い話がある。崔さんという老人がいるんだが、六十くらいだろうか、腰が少し曲がり、衰えた顔に病弱そうな田舎者が、ある日作業服を脱ぎ、体を検査するのだが、とりわけひどく震えている。骨にへばりついた皮にも鳥肌が立っているのか、とにかくひどく寒かったようだ。げっそり痩せこけて震えて立っていると、そのまま小便をちょろっと垂らした。こいつの勢いがなかったから良かったものの、もう少し勢い良ければ、前に立っている監督のズボンを濡らすところだった。監督は防寒靴の小便の水滴を地面にばたばたとしたき、

「この野郎！」と、叱りつけようとしたが、その前にそのざまがおかしくて仕方ない。

4 金裕貞学会編、『金裕貞の文学広場』、ソミョン出版、2016年、pp. 91～92。

5 イ・スンウ責任研究員「“金を国に売ろう”、黄金狂時代にも金を集め運動があった」民族問題研究所・歴史コンテンツ(<https://www.minjok.or.kr/archives/133722>)、2023.6.22。

6 全商國編、前掲書、「秋」pp.194～205、「金」pp.232～240。

「おいばれも小便垂れるのか、この野郎。」
そして手に握っていた杖であそこをぼんと叩く。
崔さんはかじかんだ身のせいなのか、少し痛そうな様子だ。

「いて。」と叫んで、少し照れくさそうに腰をかがめる。これを見てそばに集まって立っていた鉱夫たち皆がワハハと笑い声を上げた。

こうして嚴重に対策を講じても、なんとかして取って行くのだ。ある者はまげの中に金を挟んで出て来る。あるいは足袋たびの中に差し込んで履いて出て来もする。これは以前の話だ。今は看守たちもずっと賢くなった。こうしていればたちどころにばれて、追い出されるに決まっている。だから鉱夫らも日々知恵を絞る。事実、彼らは穴の中に入りさえすれば、思案する以外に考えることが少しもない。どうすればこの金を取って、楽に女を連れて暮らせるのか。よりによって鉱主ばかり食わせてやって、私腹を肥やすんじゃないか。それには一番安全な方法があるのだが、それはとりあえずぐいっと飲み込んで出ることだ。いくら鬼だって、腹の中に入った金だ。しかし、人の腸はらわたなんて鉄底じゃないんだから、金を見る前に破れてしまえば、みっともない。なぜなら、砂金ならいざ知らず石穴金は、ガラス片のような石の塊に刻み込まれているからだ。えいくそ、口の中に隠せ。耳の中に埋めろ。こんちくしょう、股ぐらに挟んで出れば、わからないだろう。甚だしくは、ドッキは肛門に金をはめ込んで出て、ばれてしまった。監督は顔をゆがめながら、金をつまみ出しておいて、「この野郎、金をけつ穴で食うのか？」と、尻を足で蹴ると、ぱたんと投げ飛ばした。

こうなってみると、監督の責任も容易ではない。盗みを防いでこそ自分の給料が上がるわけだが、一方ではやっかいな仕事だ。数か月ごとにしか洗わない服を脱がせるたび、白っぽい埃ほこりが上がる。その上、風呂はいつ入ったのか、垢だらけの体をくまなく調べていると、吐き気がしてくる。鉱夫たちはいつも豚みたいに汚い体だからだ—

春が来て、香かぐわしい風が流れて来ても、彼はなんの楽しみも知らない。向かい側の険しい山あい目まぐるしくちりばめられた椿、レンギョウ、ツツジさえも彼の興味を引くには至らなかった。人は機械とは違う。たった一つの単調な仕事に苦しめられると、しまいにはくたびれてしまうのだ。それだけでなく世の中のことに倦怠を感じるのが常だ。そんな中、疲れた体に昼の弁当を一杯放り込めば、体はさらにぐったりする。そんな時は黄金ではなく、天下を取って来たとしてもそう嬉しくはない。洞窟の入り口を守っていた監督は椅子に体をもたせかけ、両腕を広げて伸びをする。がぶ飲みをして、また巻きタバコを吸う。彼の目には昨晚抱いて遊んだ飲み屋街の女の乳首の他には何も浮かばない。ひどく眠かったので、それもおぼろげに—

この下の山の中腹で発動機は周りも気にせずブン、ブン、ブンと立て続けに音を立てる。男衆がそちらに出入りする。腰を曲げて、うんうんうめきながら力んでいるのはおそらく鉱石を運んでいるようだ。その下で谷の水は、石にも当たってざあざあと流れ落ちる。

一時二十分。洞窟の見張りが昼をちょうど済ませた後のことだ。疲れた目をしばたかせて座っていると、不意に洞窟の入り口の方へ鉱夫の頭が一つにゅっと現れた。交替の時間でもないし、今しがた出て来る必要もないのだが。さらにいぶかしいのは、背中にぐったり伸びた瀕死の者を負っている。へっ、へっ、また死んだのか？ 彼は額にしわを寄せながら、舌打ちした。しかし金鉱で人が死ぬのは、屠畜場とちくじょうの牛の死に劣らず日常茶飯事だ。それは食ってる途中で死に、用を足している途中でも死に、あるいは手鋤てぐわを持ったままで死ぬこともあるのだから。驚きよりは面倒くさいという思いが先立つ。これをまたどうやって片付けるのか。監督不十分のぬれぎぬを着せられて、辞めさせられないか。

監督は椅子から中腰で立ち上がり、
「どうしてこうなったんだ？」

「廃石に、あ、あ、あたりました。」

鉱夫はおどおどと、目を白黒させながらこうどもる。体格が大きく強そうだが、真っ黒に突き上がって見えるはしごを、その上負傷者を背負って這い上がる間にすっかり体力を消耗した様子だ。はあはあ！そして赤黒い額に汗がすうっと流れる。死に行く同僚を助けようと一秒を惜しんで騒ぎ立てる。

「これどうやって助ければいいんですか？」

監督は返事の代わりにまた顔をしかめる。背中らうつ伏せになった鉱夫の右足をにらみつけながら、作業服の腰からくるぶしまで一塊に足に結び付けた太い縄でぐるぐる巻いていたが、血、血、巻き付けた作業服の上に気味の悪い鮮血が、どくどく染み出て来るばかりだ。それだけでなく血は地面にまでぼとりぼとりと落ちて、見る人の胸に釘を打つかのようだ。もちろんその人は気絶して上着を脱いだまま、人の背中に負ぶさったままびくりともしない。首はしおれたネギのように前にぱたん^{ぱたん}と落ちて—

「これを早くどうにかしないと。」

これをか。すぐに慌てて病院に連れて行って、砕けた足首を切るのが良からう。しかし、こいつを連れて誰が事務室へ、病院へ行ったり来たり、煩わしいことをするのか。要領のある人なら、無駄なことに手を出さない。その上、幸いなことに他の奴がしゃしゃり出て来て急かすので、そちらで勝手にしろと言わんばかりに、その勢いをさらに煽り立てて

「そうだ！ 早く連れてって、薬塗ってやれ。」

急かすかのように、自分も大げさに言う。

この命令が下ると、鉱夫は飛ぶように慌てて作業場を出て来る。同僚の命がひどく危ないというように、水車小屋に向かって転がるように山裾の急斜面を降りながら、

「おい、そいつの名前は？」

「北三号の穴で私と一緒に働いているイ・ドクスンです。」と叫ぶと、またくるときびすを返して走り出す。

監督はこの様子を遠くに眺めながら、

「イ・ドクスン、イ・ドクスン。」と言いながら、ふああと伸びをしてあくびをする。

田舎の春は忙しい。農夫たちは野へ、山へ働きに出かけ、村には日なたに寝転がった犬の伸びだけ。子どもたちは土手の下の芝を這いまわって小さな籠に入れている。ヒメニラ、^{ナガバギンギン}長葉羊蹄、それにタニシー山裾の曲がり角を降りて来る時、

「誰か付いて来てないか？」

ドクスンは苛立った口調で尋ねる。しかし死んだように首は落ちたまま、用心深い声で、

「いや、もう心配ない。」

自信に満ちた快活な返事だ。少し間を空けてひそかに、

「ひょっとして、抜け落ちてないだろうな。また苦労が水の泡だ。」

「縛ってあるから、まさか—」と、ドクスンは答えはするが、言葉じりが小さくなる。気力がぱったりと消えたのを見ると、おそらくひどく辛い様子だ。少し前にはそれぐらいなら俺がやってやると希望に燃えていたドクスンだ。その時のドクスンとは程遠い様子。ひどく痛むと気力も尽きるようだ。

ドクスンは自分の家の近くに来たことを知ると、ようやく少し顔を上げた。倒れそうな平べったい古びた藁葺き^{わらぶき}の家、ウジがつつついたようにぼこぼこ穴の開いた障子戸、あの部屋で二人の子どもを連れ、女を連れて、ずいぶん苦労ばかりさせてきた。その上今となっては脚まで使えなくなり、寝込むことになってしまうとは！ 妻と昼夜を問わず言い争って、こんなにまた責め立てることになるだろうに！ ああ！ そうしてみると、背筋に鋭く身の毛がよだつ。自分の手で石を持ち、目をつぶって足に打ち下ろす。驚いた。足は碎けて潰れる。血が広がった。ああ、どんなに愚かな真似だろう。だがしかし、たった千ウォンとは、どれだけの値打ちなのか！

「まあ、どうしたのよ？」

妻は身がすくむほど驚いて飛び出て来る。夫は見つめるばかりで、返事がない。しかし、その心の内は

聞かなくても分かりきったことだった。この数日間、うんうん言っていたあの計画、そしてこうするしかないだろうと、すっかり腹は決めたが、それでも到底できずに一日また一日と、止めて来たその計画。ついにとうとう、このざまになり果てて来るなんて！

妻は前掛けで手を拭いて、あわてて夫の脇を抱えて部屋へ引き入れる。

「うん！」

夫は部屋の壁まで行って、斜めに寄りかかって座りながら、力をふりしぼる。そして怪我した脚を自分の前へそうっと引き寄せる。額に皺を寄せながら自分の手で解き始める。

太い縄はほどき取られた。そして血に濡れた作業服のチョッキを慎重にほどいてひらくと、どれが肉か、どれが骨か見分けがつかない。ただおそらく揺れ動く石が落ちる時、その角に押されてこうなったのだろう。血の塊のような肉の塊がここに一つくっついて、あるいはあっちに一つくっついて、足の指にはその形さえとどめないほどめちゃくちゃになっていて、とんでもない状況だ。まだどくどくと血が流れる。こんなにまではならなかったのに！ 彼は見るだけでもあまりにむごたらしくて、体が縮みあがった。

しかし彼はまず血でいっぱい作業服をつかみ取ってはたいてみる。やはり血がべとべとついた手ほどの石が落ちる。そいつを掴んでこっちにあっちにくまなく探してみる。暗い洞窟の中なのでカンテラの灯りにひよっとしたら見間違えたかもしれない。妻に水を汲んで来させて、そこで振って血を洗って見ると、やはり大当たり。金。これでも千ウォンにはなるだろう！

同僚はこの光景をじっと見つめて立ちすくんでいたが、

「こっちに出せ、俺が持って行って売って来るから。」

「……。」

ドクスンは黙ってその顔を注意深く見つめる。石は手にしっかりと握り、いや、さらに力一杯手を握

る。しかし、同僚が少しもためらわずに、

「金をとって売ろうが、そのまま廃石ごと売ろうが、あんまり変わらないぞ、とにかく早く金^{かね}にしておかないと、お前も薬を買えないじゃないか。一緒にやって、まさか逃げたりはしないから。」というので、「売って来い。」

ようやく安心したのか、鉱石を渡してやる。

仲間はそれを受け取って部屋を出ると、ひどく後悔の念がわいてくる。自分が足を潰して、血を流し、そして鉱石を持って出て来たなら二つ取れたのに。見つけたのは自分だったがドクスンに二つやり、もとの主人は一つしか取れないなんて。その時はなぜこんな勇気が出なかったのか。今になって考えれば、悔しくて悔しくてこの上ない。彼はあたふたしながら地面に荒っぽく唾をべつと吐き、またべつと吐き、しおり戸を回って出た。

この様子を力の抜けた視線で遠くから見つめる。ドクスンは顔を曇らせる。あの様子を見ると、どうやっても一人で取って逃げるつもりだろう。しかし、まさか。

生きるために食べるのに、食べるために体を捨て、そして命まで捨てる。それを彼は知っているのか、あるいは知らないのか、痛みには耐えきれず、

「ああ。」と倒れそうに長く息を吐くと、

「取って逃げはしないだろ？」

妻は何も答えない。頭を垂れたまま、見るに耐えないその足をじっと睨みつけるばかり。しかし、浅黒くやつれた顔に突然澄んだ涙が落ちる。泣いている場合じゃない。自分の足をこうまでしながら、稼いで来いとは言わなかったのに。一体これからどうするのか！

しばらくして顔を上げると、声を張り上げると、

「痛くない？」と、つんとして、きつく言い放つ。

「痛くないさ、すぐ治るだろう。」

ほかならず見栄を張ったうわべだけの返事だ。しかしそれでも痛みには耐える気力がない様子だ。しばらくするとその場でそのまま倒れ、

「あああ！」
残酷な悲鳴だ。

2 「秋 (가을)」

俺が駐在所にまで行くことになる時は、俺にも多少の責任があるのかもしれない。しかし実のところ、いくら考え直してみても、俺は少しも責任を感じていない。ポンマニは自分の妻を（ここが非常に重要だ）、自身の手で直接牛売りに売ったのだ。俺が妻を誘い込んで売ったり、あるいは俺がポンマニを騙して二人で共謀して売り飛ばしたわけでは絶対にない。

うちの村で皆が知ってるように、ポンマニは他人の罠に引っかかるような奴じゃない。俺と奴がたとえ隣り合って住んでいて気の置けない間柄であるはずでも、一度だってあいつの胸の内を打ち明けたことはない。もっとも俺だけじゃなく、友人の間でも何か聞いてもせいぜい三言くらい答えてしまうという、そんな奴だ。こう面倒くさそうな表情で顔をしかめて、世の中が気に食わなさそうな奴だ。この前はあいつの妻がうちにやって来て、どんなにかひどく泣く泣く訴えたことか。さらに困ったことに、食べるものがなくなったらちょっと工面しようともせず、お釈迦様のように部屋の隅にぼうっと座ってばかりいると、ぼうっと座っているというより実は、一言もはっきり言わないそのむっつりしたところが憎い。しかしそれでも妻は歩き回って食糧を借りて来て、相変わらず夫を敬っているのだ。

こんなポンマニを俺が騙したというのは、本来筋違いだ。ただ一つ俺に罪があるとすれば、あの日売買契約書を俺が代筆してやったことだけだ。

昼食を食べて俺が土間に座って縄をなっていると、ポンマニがやって来た。片手に風になびく印札紙⁷を一枚持ち、俺の前に来てぴたっと止まると、

「なあ、お前、契約書書けるか？」

「契約書ってなんだ？」

「いや、ちょっとな…」と、あいつはぎこちない様子で返事をためらうではないか。おそらくそばに他の人

がたくさんいるので、言い難いのもしれなかった。

しかし俺は三四日前にあいつにこっそり聞いたところがあり、ああ、妻のことかとすぐに感づいた。しおり戸の外にあいつを連れ出して来て、その耳元に「お前の女房どうなったんだ？」

「うん。」

あいつは一言こう答えると、きょろきょろとあたりをうかがいながら、何かしばらく考える素振りを見せたかと思うと、

「あの川渡ったところに住む牛売りに売ることになった。ジェスンの家（酒屋）の紹介で今居酒屋に来てるんだけど、契約書を書けってうるさくて、でも誰も書ける人がなくてお前に書いてもらって来るからちょっと待っててくれって言って来たんだ。お前はちょっと学校に行ってたから、書けるだろ？」

「でも俺の家、墨も筆もないぞ？」

「じゃあとにかく俺と一緒にいこう。」

澄んだ小川を紅葉で染め、冷たい風が吹き上がりたり吹き下りたりする晩秋だ。枯れた丘の上をポンマニは黙々と歩き、俺は腕組みをしてその後ろについて行った。この時少しではあるが、俺はあいつの友人としてどうなるかが一度は止めたかった。他のことはともかくとして、ヨンドゥギ（五歳になった息子だ）を思えば妻だけは売ると内心では止めたかったのだ。でも俺があいつを食わせてやれない以上は、他人のことだからといってあだこうだと口出しするのも難しい。

一緒に餓えるより、妻はよそへ行っていい暮らしをして、夫の方でもその金で食べてというふう暮らし向きが良くなることもあるじゃないか。ポンマニの後ろをついて行きながら、俺はむしろ自分のことがもっと心配であることに気付いた。一年間精一杯農作業をしたのが、開けてよくよく見てみると、俺の取り分はわずか稲二斗半が残ったばかり。もちろん全部はたいたって借金も清算できないポンマニ

7 印札紙：美濃紙に罫線を引いた紙

に比べればちょっとましかもしれないが、これでおちの家族がひと冬を過ごすことを考えると、目の前がそのまま真っ暗になる。俺も今年の冬は金鉱でもやってみようか、でなけりゃ銭打ちを習って賭場に通うか、それにしたって資金があるだろうに金はないし、ポンマニみたいに売りに出す妻もない。うちの家には女といたって病気の母ちゃんしかいないが、歳も取ってるし（少し恥ずかしい）、父ちゃんがいるから俺の好き勝手にできないし—

こんなことを考え込んで、まったく俺はポンマニにお前の女房を売るなどか何とか言うどころではなかった。俺も早く結婚していればこんな時に売り飛ばすのに、というつまらない後悔ばかり。

大通りに抜け出て、
「じゃあ、お前は先に行行ってくれ。俺は墨と筆を借りて来るから。」

「^{すずりいし}硯石もないとだめだぞ—」

俺一人で栗の木の下の酒屋にとぼとぼと訪れた。鶏の糞が辺り一面に散らかった縁側に注意して上がりながら、牛売りという奴が一体どんな奴なのか非常に気になった。牛も買って女も買うんだから、これはきっと金も相当持ってる奴だろう。

しおり戸を開いて入ると、最初に目についたのはふっくらした頬で、ふくよかだが陰しい顔つきの独眼だ。こいつが上座に酒の席のお膳を置いて座り、水を飲んだ面で俺をじろりと見つめるのだ。パジチョゴリには^{あか}垢がべっとり付いている上に、自分なりにおしゃれしたと見えて黄色い軍人の脚絆^{きやはん}をめぐり上げていた。

こいつとその横の片隅にしゃがみ込んでいるヨンドウギの母ちゃんとが夫婦になるってのはどう見てもあんまり合わないようだが、ヨンドウギの母ちゃんはどうかろうがその指示だけを待つというように、黙って子どもに乳を飲ませるばかりだ。俺を見つめながらやや顔を赤くしたかと思うと、

「おじさん、こっち！」と言ってまた首をうずめた。

この時、牛売りに紹介してくれたのは酒屋のばあ

さんだ。三日足らずでキツネにはなれなかったほど、手口はざる賢くて

「二人とも挨拶しな。こっちは私の遠い親戚の甥なんだけど、牛売りで羽振りが良いのよ。」

と言って、骨ばった手で俺の背中をぽんとたたき、

「この人がさっきの契約書を書けるジェボンイよ。」

「そちらは、どちらさんか、互いに挨拶しましょう。私は川向こうに住んでるファン・ゴプンと言います。」

そいつはすぐに愚鈍そうに大きな声で挨拶するのだ。俺は引けを取らないようにどっしりと威勢よく座って、私は、と名前を名乗った。そしてうちの父も十年前にはちょっとした田畑がかなりあったことをはっきり伝えたが、それは聞かずに言うことには、
「契約書を書いてほしくて呼んだんですが、面倒かけますが、一つよろしくお願いします。」

人でなしめ、こりゃとんでもない話だ。俺は友人のポンマニのために来たのに、あんな奴の命令で来たとしても言うのか。この野郎、えらく生意気だなと思ひ、顔をしかめて横を向こうとしたが、

「まずは一杯やりましょう—」というのには、両手で酌を受けずにはいられない状況だった。

ポンマニが笑顔も忘れたような顔でふうふうあえぎながら走って来た時には、すでに俺は三杯も飲んでいて、ほろ酔い機嫌の手つきですり減った筆を握り、牛売りの要求通りに書いた。

売買契約書

一金五十ウォンなり

上記の金額は私の妻の代金として確かに領収します。

甲戌年十月二十日

チョ・ポンマン

ファン・ゴプン殿

ここにポンマニの拇印を押してやるので、どれ一度読んで見てくださいと言う。そしてしばらく疑わしそうに見つめ、何を思ったのか、「それじゃあこれで良いんですが、もし後でチョさんが金を持って来て、返してほしいと言ったらどうするんです？」と目を丸くして俺を責めるのだ。こいつが牛売りの場でする通りにここでもするんじゃないか。あまりにも呆れて、俺もぼかんとしていたが、隣でポンマニがそのまま書いてくれと言うので、

どんなことがあっても私の妻を返してくれと言わないことを誓います。

それでようやくチョッキのボタンの穴に太い弓紐で口を閉めたでかい財布がはじめて動く。垢のこびりついた一ウォン札の束を取り出すと、指に何度か唾をすりつけながら丁寧に数えてみる。こんなにじつとりするほど唾をなすりつけて数えたにもかかわらず、ポンマニがまた丁寧に舐め始めるのを見ると、おそらく紙幣は唾をなすりつけてこそ長生きするものらしい。

俺がここで手数料を一文でもおごってもらってないことは、本当に命を懸ける。五ウォンずつの手数料で、十ウォンをひったくったのは酒屋のばあさんで、俺は酒を何杯か飲んだだけだ。それだけじゃなく牛売りを、いや、ヨンドウクの母ちゃんを五里離れた共同墓地まで見送って行ったのも、言うなれば俺だ。

峠の尾根でくねくねと回り降りる山道を見下ろし、俺はいくらか気持ちはずぐれなかった。同じ村で一緒に住んでいたのに、売られて行くのを思うと、まったく他人事とは思えない。その上、風は非常に冷たいのに、まだ単衣ひとえのチョゴリで震えて立つそのさまがかわいそうで—

「ヨンドウクの母ちゃん！ 元気だな。」

「おじさんもお元気で。」

こう一言残したきり、彼女は先頭に立って田んぼ道をさっさと行ってしまふ。まるで行くべき所へ発つのだというように急ぎながら、少しも名残惜しい

様子がない。

そして俺の後ろに立っていたポンマニさえ元気でという言葉一つないのには、実に驚かすにはいられない。チャンスン⁹のようにしっかりと立ったまま目だけばちくりさせているじゃないか。こん畜生、たとえ一日一緒に生きたとしても自分の女だろうに。ほとんど十年も牛のようにこき使った妻だ。実のところあいつが今まで飢え死にできなかったのは、優しくてやりくり上手な妻のおかげだった。それなのに挨拶一つないとはこん畜生めと、ひどく憎らしかった。

ヨンドウギは父親のふところにしっかりと捕まり、興奮して泣く。遠くに行ってしまった母を呼んで両手の拳で父の胸ぐらをめちやくちやに叩いたが、一度小突かれてぴたっとやめた。そしてしばらくするとまた叩き始める。

牛売りはすっかり酔っぱらって、しばらく言いたい放題にしゃべると、

「友よ！ どうも世話になって、このご恩は今度返します。」と、えらく粋に挨拶する。そしてふらふら頭を下げると、突き出た石に引っかかり、太った体はそのままごろごろ転がってしまった。中腹に伸びた松に枝がなかったら、崖から落ちてそのまま裂けていただろうが、運よくぼんぼんはたきながら起き上がると、苦々しそうな顔をした。奴は少しきまり悪いのか、俺たちの方を振り返って一度にこっと笑ってまた歩き出す頃には、ヨンドウギの母ちゃんはずでに山一つ越えていた。

こうして帰って行った牛売りの奴が、五日後には俺に駐在所へ行こうと引っ張って行くじゃないか。詐欺はポンマニから買って置いて、俺になすりつける。それも暇な時ならまだしも、人がとても忙しくこや肥しを運び出しているところに、そいつに言い聞かしても聞かないので、俺も怒らずにはいられず、腹立ちまぎれに奴の胸ぐらを掴んで押してしまった。草地に行つてばたつと倒れてから起き上がると、今度は

9 チャンスン：村の守り神として道端に立てられる木像

俺の胸ぐらを締め上げて、牛にするように引っ張る。

俺が手数料を取ったとか、あるいはポンマニを俺が紹介したならまだしも、契約書を書いてやって酒何杯か飲ませてもらった他に、俺に何の罪があるって言うんだ。奴の言うには、ヨンドゥギの母ちゃんが来て四日目つまり一昨日の晩、寝ている間にどこかにいなくなった。明るくなれば戻って来るかと首を長くして待ったが、全く帰って来ない。今日は朝っぱらからあちこち探し回って、ようやく俺たちが組んで詐欺をはたらいたことに気付き、今訪ねて来たというのだ。自分の妻の行ったところを教えなとお前と一緒に死ぬと独眼の顔を押し付け、がりっと歯ぎしりをして見せる。

「俺が売ったっていうんですか。俺を掴んでどうするつもりです？」

「ポンマニは逃げてんだから、お前は行き先を知ってるだろ？ お前らグルになって俺にひどい目あわせやがって、こいつらめ！」

「いや、ポンマニが逃げたのか、あるいは用があってどこか出かけたのか、今どうやってわかるんですか？」

「うるさい、酒屋のおばさんに全部聞いた。また騙そうとしてるのか、この野郎！」

そして俺を畔に一度放り投げて、土をはたく間もなくまた引っ張って行く。酒屋のおばさんがポンマニの行き先はあたしが知ったことか、帰りなさいと言ったらしいが、手数料をもらったのを返すのが惜しくて自分の責任を俺に押し付けたに違いない。こうなれば牛売りの聞くところには、俺がまるでポンマニをそそのかして妻を売らせて、後でこっそり手数料を取ったことになっちゃう。

そういえばポンマニもあの妻がいなくなったという一昨日、どこかへいなくなった。逃げたのか、あるいは用があって親戚か誰かのところへ訪ねて行ったのかそれは詳しくわからない。しかし村を歩き回って妻が借りて来た食糧や金といったこまごまとした借金を全部金で返してくれた奴だ。逃げ出すのに十

分な罪なんてあいつにはなかった。ヨンドゥギが夜毎母ちゃんを呼んでわめき散らす、見るに耐えなくて自分の本家に預けに行ったのかもしれない。

ポンマニが夕方うちに来た時には、どこで飲んだのかほろ酔い機嫌だった。中庭に入って来るとマッコリを一瓶取り出し、

「これ、お前飲めよ。」

「こりゃなんで買って来たんだ。とにかく腹が減って、ありがてえ。」と、俺は台所に降りて杯と塩漬大根の切れ端を持ってきた。そして二人で土間に腰をおろして飲み始めた。

酒一瓶を空にしてから、あいつはあれこれとしゃべると、俺の前に金一ウォンを取り出して置く。

「この前世話になった礼だ。」

「礼だって？」

俺は目を丸くして、その顔をまじまじと見つめた。しかし、内心ではこれは代筆料でくれるんだなと、すぐに気づいた。他人の妻を売った金で代筆料を受け取るのは、ひどく無礼なことだということくらいは俺もよくわかっている。酒を飲んだからもう良いと言っても、

「また酒でも買って飲んでくれ、俺はこれ以外にもまだあるから—」と、あえてポケットにまで入れてくれ、困ってもいたのでそのまま受け取っておいた。それからその後はポンマニもヨンドゥギもうちの村からいなくなり、そればかりかどこへ行ったのか見た人さえ一人もいない。

こんなポンマニを牛売りのこいつが、俺に探しておけと命令するのだ。胸が息苦しいほどぐっと縛り付けられて引っ張られて行くので、村の人々は集まって来て見物し、ない罪があるかのように顔が真っ赤くなる。大きな溪流まで来た時には、奴もきまりが悪いのか、そっと放してそのまま歩いて行く。俺が反抗してこそ自分も殺気立って互いに罵り合うところだが、俺がおとなしくついて行くのでその必要がない。そいつの望み通り駐在所まで行きさえすればそれまでなんだから。

俺たちは何も言わずに前後に並んで十里の道のりを歩いた。深い山道なので人ではなく、前後の山々は色とりどりに染まり、時々ひゅうっと落ち葉が飛ぶ。だんだんと沈んでいく夕日に遠い峰は赤紫色になり行き、それに反射して空まで赤みがかった。険しい岩から時々石が転がり落ちて水たまりの澄んだ水を掻きまわし、どぶんという音は実にうら寂しい。こっちの山で雄キジがバタバタッ、あっちの山で雌キジがバタバタッ、そしてその間で牛売りの野郎と俺とがのろのろ、じたばた。

もうひと峠を奴が太った体で息切れしながらはあはあと上がって来る頃には、怒りは完全に消えていた。草地にへたっと座り込んで息を鎮め、タバコを取り出して、何か気乗りしたのか俺に「足痛いでしょう。座って休みましょう。」と、親切に話しかける。俺もその隣に座って、渡してくれる巻き煙草を吸いくわえた。まだ駐在所まで十五里¹⁰ほどあるので、暗くなる前にはたどり着けないだろう。

「さっきは俺が大変すまなかったです。」

「とんでもないです。」

「ところで本当にポンマニが行ったところは見当もつかないですか？」

「おそらくけど、トンネイのあいつの本家に行っただんじゃないかと思えます。」

この言葉に奴は驚き、非常に喜び、独眼をぐっと押し付けばちくりさせる。そして泣きながら失った金が惜しいのではなく、あのような女には再び出会えないだろうと言う。もともと男やもめの身で利口そうな妻をもらって水商売をさせようと考えていたところだった。やってみると、商売上手なだけじゃなく妻としても充分な女だ。実際数日暮らしてみたが、夫にあんなに愛想よく、愛情深い女は今まで見たことがない。だから俺もあいつのために絹で服を作って着せてやり、カルビを焼いて食わせてやるほど喜んでたんじゃないか。追加の金をかけてでも探そうとするのは、あいつに会いたいからであって、決してポンマニに金を返せと言うつもりはない。だ

から何も心配せずに、

「ポンマニの行きそうなところは全部教えてくれ。」奴の口調が怪しくそそのかすので、不快なことこの上ない。何も答えずに黙って座り、タバコを吸っていると、

「同じ日にいなくなったのを見ると、二人が組んで逃げたんじゃないですか？」

「四十里ほど離れた人が、どうやって組んだりするんですか？」

俺がこうばつと立ち上がって面と向かって責めるのには、奴もしばらく落胆の色を見せながら、

「いや、とりあえず俺が…ポンマニならあの妻がどこに行ったかくらいは知ってるんじゃないですか？」

と、叱られた子どものように甘えたようにこびる。これも恋煩^{こいわずら}いなのか、さっきまで偉そうにしてた奴が今になってみれば俺に反論もできない。もしかしたら何か聞けるかと気をもみながら、俺の顔色ばかりうかがって、

「トンネイの本家はどこにあるか知ってますか？」

「うちの叔父の家もトンネイにあります。」

「それじゃあ、今日は帰って酒でも飲んで、明日早く一緒に行きましょう。」

「そうしましょう。」

これ以上話したくなくて、俺は鼻先の返事であしらって、遠い西の空を見つめた。ちょうど日が暮れて、山里はきらきらまばゆい夕焼けで覆われる。峰はむしろかっかと沸き立つ火の玉となり、怒りがこみ上げたいかめしさを見せる。そして低く聞こえて来る、俺たちの頭の上に落ちる落ち葉の音—

牛売りが目を閉じてしゃがみ込んで座っているのを見ると、明日の計画を立てているようだ。しかし俺はいくら考えても、ポンマニはいくら考えても、ポンマニはあのトンネイの本家にはいないような気がするのだ。

10 十五里：日本の一里半

参考文献

金裕貞文学村ホームページ、2024.12.23 参照。

何月号に掲載されたかは不記載。(http://www.kimyoujeong.org/theme/basic/html/kimyoujeong/life.php?ckattempt=1)



全商國編、『金裕貞 小説選集 山里の旅人』、ヨニン M&B、2016年、p.306、「秋」pp.194～205、「金」pp. 232～240。
金裕貞学会編、『金裕貞の文学広場』、ソミョン出版、2016年、pp. 91～92。

イ・スンウ責任研究員「“金を国に売ろう”、黄金狂時代にも金集める運動があった」民族問題研究所・歴史コンテンツ(https://www.minjok.or.kr/archives/133722)、2023.6.22.



朴 鍾祐 (神戸大学グローバル教育センター・
人文学研究科／韓国文学)
石塚由佳 (韓国全南大学大学院博士課程在学／
韓国文学)